

今週の為替相場見通し(2022年4月4日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		121.28 ~ 125.10	122.55	119.00 ~ 124.00
ユーロ	(ドル)		1.0945 ~ 1.1185	1.1048	1.0900 ~ 1.1200
(1ユーロ=)	(円)		134.04 ~ 137.50	135.37	132.50 ~ 136.50
英ポンド	(ドル)		1.3052 ~ 1.3181	1.3115	1.3000 ~ 1.3300
(1英ポンド=)	(円)	*	159.05 ~ 164.64	160.64	156.00 ~ 164.00
豪ドル	(ドル)		0.7456 ~ 0.7540	0.7498	0.7400 ~ 0.7600
(1豪ドル=)	(円)	*	90.76 ~ 94.32	91.89	90.50 ~ 93.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 119.00 ~ 124.00 円

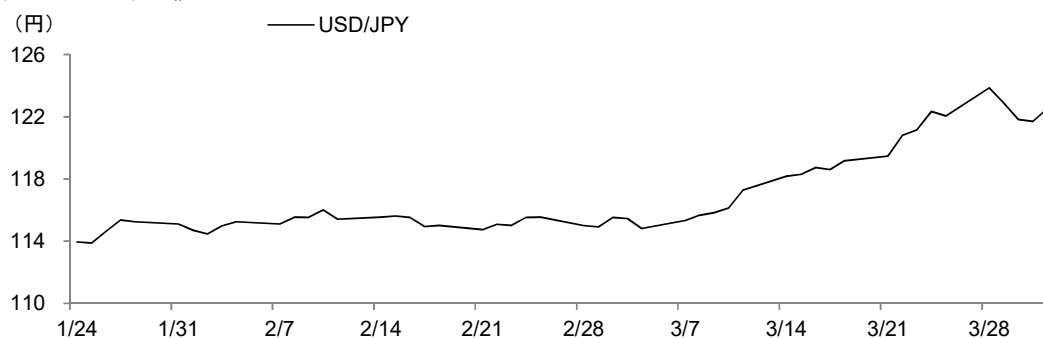
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円はボラティルな相場となり、2015年以来の高値である125円台を付けた。週初28日のドル/円は、日銀による2月以来の指値オペ通知により、日銀の緩和維持が円安容認と捉えられ、123円台まで急伸。海外時間にも流れが継続し、ドル/円は2015年8月以来のレベルである125.10円まで上昇。29日は利益確定の売りや、ロシア・ウクライナ間の停戦交渉に進展があったというヘッドラインに伴う原油相場の急落を受けたドル売りを背景に、一時121.98円を付けるなど乱高下。その後は原油相場が持ち直したことによる反発もあり、122円台後半でクローズ。30日は東京時間正午すぎに黒田日銀総裁と岸田首相が会談したことが伝わると、円安対策への警戒感から円買いとなり121.32円まで下落。ただ下落が一服すると同水準で方向感のない推移となった。31日は本邦の年度末に伴う実需のドル買から122.45円を付けるも、その後はドル売りが優勢となり、一時121円台前半まで下落。その後は買い戻しも弱く、121円台半ばでクローズ。4月1日は海外時間に主要な経済指標の発表が相次ぐことを控え122円台で小動き。海外時間に発表された米3月雇用統計は全体的には堅調な結果。非農業部門雇用者数は減少したものの、前月分が修正。失業率の低下と前年比の平均時給が上昇したことにより、5月会合で+50bp利上げの思惑が高まり、米金利が上昇する中ドル/円も一時123円台を突破。ただ米金利の上昇が一服すると、週末の調整もあり122円台半ばまで反落。その後は方向感のない推移が続き、122.55円で越週した。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想する。先週は日銀が指値オペにより緩和継続姿勢を示したこともあり、日米の金融政策の違いによる金利差拡大から全通貨に対して円安が加速。ただ一方で、黒田シーリングに近接する125円ちょうど近辺では明確な売り需要が出てきており、同水準を目指すためにはもう一段と材料が必要だと予想する。また米金利については、米2年債と米10年債のイールドカーブが3/29には一時逆イールドとなるなど、FRB高官らによるタカ派発言を市場は既に織り込んでおり、米10年債利回りの一段の伸びも考えにくい。その為、ドル/円も上値の重い展開が続くことを予想。また、2016年にはトランプ氏やクリントン氏らによる円安批判から円高に大きく振れていることにも留意したい。今週は4日(月)米2月製造業受注/耐久財受注、5日(火)米2月貿易収支、米3月ISM非製造業景況指数、6日(水)FOMC議事要旨等の経済指標の発表を控えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/28~4/1)の値動き: 安値 121.28 円 高値 125.10 円 終値 122.55 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1200 132.50 ~ 136.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて続伸。週初28日、1.0985付近でオープンしたユーロ/ドルは日銀による指値オペ措置を受けてユーロ/円が急騰、ユーロ/ドルも連れ高となり1.10ちょうど手前まで上昇。その後は、追加材料に欠いて反落し、一時週安値の1.0945をつけ方向感のない値動きとなった。29日、1.10ちょうど付近で小動きだったユーロ/ドルは、ロシア・ウクライナを巡る停戦期待の高まりや米金利低下に伴うドル売り圧力にサポートされて米国時間に1.11台半ば付近まで急伸。ユーロ買い一巡後は1.10台後半で底堅く推移した。30日、ユーロ/ドルは米金利低下に伴うドル売りに加え、ユーロ圏3月鉱工業信頼感指数などの結果に後押しされ1.11台後半まで上昇した。31日、ユーロ/ドルは前日の流れを受けて一時週高値の1.1185まで上値を伸ばしたが、ロシア・ウクライナの停戦交渉の長期化懸念が嫌気されて1.10台半ばまで急落した。週末4月1日は、1.10台後半スタートし、欧州株は底堅く推移するも、米金利上昇がユーロの上値を抑制する展開。米独金利差が拡大する中、ドル買い優勢となり、ユーロ/ドルは一時1.1028まで下落し、引けにかけてはやや値を戻し、1.1048で越週した。

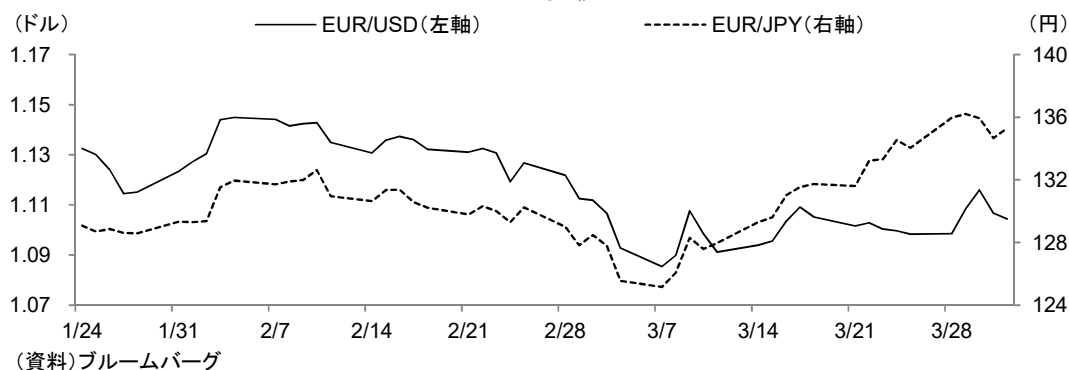
今週のユーロ相場はもみ合いの展開を予想する。先週のユーロ/ドルはウクライナ情勢の停戦交渉が再開されたことや、ドイツなどユーロ圏におけるインフレ指標の予想を超える結果を受けて、対ドルでユーロが買われる展開となった。一方で、31日にロシアが天然ガスの購入に際してRUB建ての支払いを義務付けると発表されたことで、ユーロ圏のガス共有停止を警戒して、ユーロが売り戻される格好となった。欧州においてインフレ対策が喫緊の課題となっている一方、米国においてもインフレへの緊急対策が取りざたされている中、今週ユーロについては、引き続きウクライナ情勢やECB要人によるインフレ対策への言及をにらみつつ、ユーロドルはもみ合いの展開となろう。今週の重要指標の発表は4日(月)ユーロ圏2月PPI、6日(水)ユーロ圏小売売上高の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/28~4/1)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0945 高値 1.1185 終値 1.1048

(対円) 安値 134.04 高値 137.50 終値 135.37



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3300 156.00 ~ 164.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は下落。週初28日に対ドルで1.32付近でオープンしたポンドだが英中銀ベイリー総裁のハト派発言で1.31を割り込み大幅下落。しかし一方の対円では、日銀の長期債指値オペ後のドル円の大幅上昇に連れ高し、実にブレクジット国民投票の2016年以来となる164円台をつける(が結局NY引けにかけて162円台まで押される荒い値動き)。29日はウクライナとロシアの停戦協議への期待から日中1.31台半ばまで戻すがNY時間には再び1.31を割り込む。30日には1.31台後半まで買い戻される。ドル長期金利が低下する中で英米金利差に起因するとの見方が多かった。31日はロンドンフィキシングに絡む変動はあったものの1.31台で方向感ない推移。1日は英3月製造業PMIの確定値が若干の下方修正となったが影響はなし。米長期金利が再上昇したことで全般的なドル高傾向となり、また米3月雇用統計が堅調だったことを受けポンドは軟調。1.31を挟んで推移し週末を迎えた。

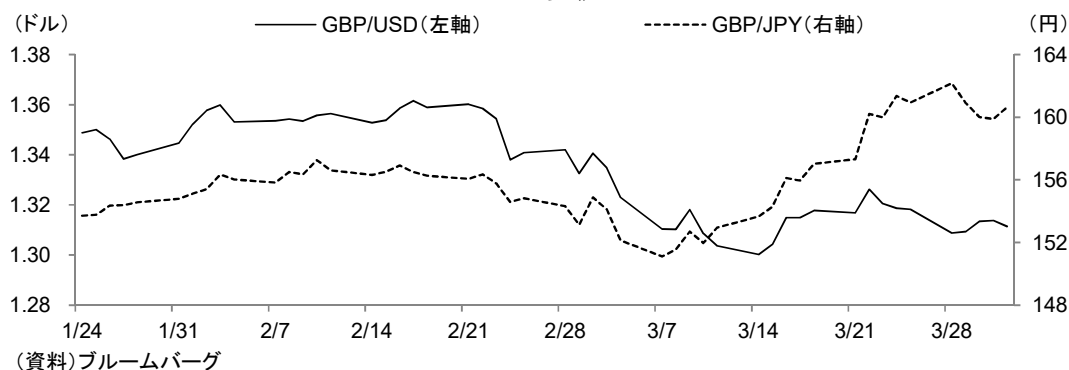
今週のポンドは対ドルで引き続き上値重い展開を予想。ウクライナとロシアの停戦交渉が焦点となるが、大きな進展がなければポンドへの影響は限定的。また既に先行して利上げした英中銀がややタカ派姿勢を軟化させてきている中で米Fedのタカ派姿勢を見るに対ドルでの上値はやはり限定的と見るのが現実的か。一方で対円では引き続きボラティルな動きとなりそう。円高方向のリスクが意識されやすい中、ひとまず当面のサポートとしては50日平均の156円辺りまでの押し目の可能性は見ておいて良さそう。オプション市場で織り込まれるインプライド・ボラティリティも当然ながら上昇しているが、1週間の短期でおよそ前後2円程度の変動を見込んでいる模様。プライシング的には引き続きプットオーバーとなっており下落方向のリスクが見込まれている。なお経済イベントについては材料薄で、英3月の各種PMIの確定値が週初に発表されるが大きな修正がされない限り材料視されないだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/28~4/1)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3052 高値 1.3181 終値 1.3115

(対円) 安値 159.05 高値 164.64 終値 160.64



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7400 ~ 0.7600 90.50 ~ 93.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.75を挟んでもみあい。28日、アジア時間帯はじりじりと値を切り上げ、5カ月ぶり高値0.7540を記録後、反落。NY市場オープン頃から下落幅を拡大し、0.7490近辺で引けた。29日、豪2月小売売上高は前月比+1.8%と市場予想を上回る伸び率となったが、豪ドルの反応は限定的でアジア時間内は0.74台後半エリアでもみ合う展開に。欧米時間に入り、ロシア・ウクライナの停戦交渉進展への期待から、原油相場が大幅下落する動きに連れて豪ドルも売りが膨らみ一時0.7460を下回るレベルで取引されたがすぐに買い戻された。ロシア・ウクライナ交渉では停戦合意には至らなかったものの、リスクセンチメントの回復を背景に株価が上値を追う展開となり、豪ドルは0.75近辺まで上昇。30日、特段新しい材料が無い中、方向感なく終日狭い振れ幅での取引。31日、ロシア・ウクライナ停戦交渉への期待剥落からリスクセンチメントが悪化し、株安・債券高の流れに。豪ドルは序盤から小安く推移。バイデン米大統領が石油備蓄から日量約100万バレルの追加放出を指示とのヘッドラインが流れると、原油先物が大幅下落。月末・四半期末のリバランスによるフローなどを背景に短期ゾーンを中心に豪金利が低下する中、豪ドルは売りが優勢となり一時0.7470近辺まで下落。1日、アジア時間内は小安く推移したものの、米3月雇用統計発表直前には買い優勢となり一時0.7525まで上昇。強い米3月雇用統計を受けて米短期金利が大きく上昇すると、豪ドルは反落し、0.75付近で引けた。

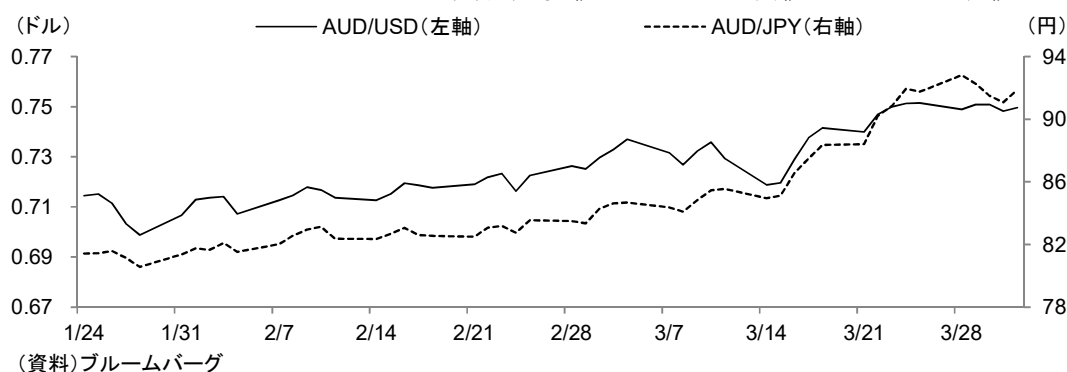
今週の豪ドルは引き続き方向感に欠く展開を予想。今週は5日にRBA理事会、8日にRBA Financial Stability Reviewの発表がある。今週のRBAでは、金融政策変更を予想する向きは少ないが、足許の底堅い労働市場と4月27日(水)の豪1〜3月期CPIを控えて、声明文にスタンス変化をほのめかすような文言が出てくるかどうか、注視したい。ロシア・ウクライナ停戦交渉に関しては前向きな報道が散見される中、地政学リスクへの警戒が徐々に薄れてきおり、豪ドルに追い風となっている。米・豪金融政策の行方に改めて市場の関心が向いており、今週のRBA及びその後の市場の反応を見守りたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/28~4/1)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7456 高値 0.7540 終値 0.7498

(対円) 安値 90.76 高値 94.32 終値 91.89



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。